

追悼 青木やよひ



撮影：新井翠題

魂に触れるということ 北沢方邦

「魂に触れる」という経験がある。ごく稀に起こることであるが、芸術作品を読む、聴く、観るという経験を通じて、あるいは事物やできごとや風景や光景でもいい、またひととの関係のなかでの一瞬、もしくは動物との出会いでもよいが、全身全霊が深く打たれる、つまり魂が震える事態である。

魂とはなにか、という問いがすぐつづくかもしれないが、古語の《タマ》が万物の靈魂と同時にその象徴的事物の玉を意味したように、それは思考を身体と結びつけ、さらに人間を宇宙と結びつけているなにか、あえていえば数式を事物に結びつける《演算子》であるといってしまうもいい。その琴線が震える経験である。

学校教育などで聴いた経験はもちろんあるだろうが、おそらく青木やよひがほんとうの意味ではじめてベートーヴェンと出会った経験がそれだと思われる。その二度の体験に私は立ち会っていた。最初は『ピアノ・ソナタ作品一〇変イ長調』で、私がひとから借りて持参したレコードである。あの「嘆きの歌」にさしかかったとき、彼女の瞳に大粒の涙が光るのをみた。

二度目はロマン・ロラン友の会の若干のメンバーとともに、同じくレコードで『弦楽四重奏曲作品一三三イ短調』を聴いたときである。その「神なるものへの感謝の歌」で彼女の魂が震えるのを感じ取ることができた。終了後、口々に感想を述べる他のひとたちをよそに、感動のあまり口もきけず、はるか別世界にいつてしまったようにみえた。

魂とは人間を宇宙に結びつけるなにかであるとしたが、ベートーヴェンの後期の諸作品は、まさに宇宙を媒介として人間相互を、そして人間と大自然を結びつけ、触れ合わせるものである。その深みに降り立つとき、その音は魂に触れるのだ。

青木やよひの『ベートーヴェンの生涯』を読むとき、ベートーヴェンの人間像が生き生きと眼前に迫ってくるだけでなく、彼女の魂に触れたその音楽との出会いの記憶が、われわれの琴線に触れ、鳴り響くのが感じられる。

この遺著は魂に触れる。

特別座談会 「ベートーヴェンの後期作品をめぐって」

伊豆高原ヴィラ・マリーヤにて（二〇〇七年一月）

出席者（あいうえお順）

青木やよひ（評論）、北沢方邦（構造人類学）、

パーク・ヨンジ（ピアニスト）、

森淳二（出版）

司会・片桐祐（外国語講師）

△ベートーヴェンの入り方▽

●片桐 ベートーヴェンには一般的に「月光」「運命」など前期・中期作品から入門するようですが、やはりそのあたりが聴きやすいということですか？ 世界的にもそうなのでしょいか？

●森 僕もベートーヴェンは中期から聴き始めました。後期はすごく近寄りたかったです。ところが青木先生は後期、作品一〇〇のピアノ・ソナタ、一三二の弦楽四重奏曲から聴き始められました。めずらしいケースではないでしょうか。それ以前には有名な『英雄』『運命』などは聴かれておられなかったのでしょうか？

●青木 いま考えてみると聴いていないんですね。女学

校の先生が音大の音楽科出身だったんですけれども、そろそろ戦争が始まって、外国の音楽をリサイタルで歌うというような機会がなくなっていたんです。それで、せめて子どもたちだけには名曲でも聴かせてやろうと思っただけでしょうね。

それで十二、三歳頃最初に聴いたのが「月光」だったんです。そのときにはだれのなんという曲なのか、まったく知らないでいました。ただ月の光の下を水が流れて、激しくなったり緩やかになったりというイメージが頭にインプットされて、非常に強い印象を受けました。ただ当時は「ベートーヴェン」という個人のイメージとは結びついていませんでした。

だから「ベートーヴェンを最初に聴いたのは作品一〇〇のピアノ・ソナタや晩年の弦楽四重奏曲から」なんて言っていました（笑）。

△作品の構築性▽

●片桐 話は飛びますが、いろいろな奏者がいるなかで、この奏者はどうもな、と思うような奏者が市民権を獲得しているようなことはありませんか？

モーツァルトを習ったときよりもベートーヴェンの曲の方がむずかしい、というのはありましたか？

●パーク ピアノを習う場合、成長過程ごとにこの曲をやらなければならない、というのがありまして、選曲がなされています。それは小さい頃にモーツァルトばかり弾いていて成長するにしたがってベートーヴェン、というのではないです。

どこか音楽大学を受験したいと思ってレッスンを受けると、モーツァルトが弾けるようになって、ベートーヴェンはその次、というふうですね。難易度的にはそういう感じじゃないでしょうか。

ただ、手が大きくないとできない、というのもありますね。子どもの頃はモーツァルトの方が弾ける曲が多いけれども、ベートーヴェンは手が届かない。そういう意味では中学・高校生の受験生にはベートーヴェンがレヴェル的には上ですね。

●北沢 モーツァルトってのは逆にむずかしいんですよ。子どもの頃は平気で弾いても、おとなになったら自意識が邪魔して弾けなくなる。自意識を超えたらほんとうに透明なモーツァルトになるけれど。

●青木 ベートーヴェンのピアノ曲は中期は弾きやすいのに、晩年の曲はすごく弾きにくい、とよくピアニストからききました。ベートーヴェンも、とくに晩年はシンプルにシンプルにと言っていて。それと関連はないかしら。

●北沢 とくに「ディアベリ変奏曲」がそうです。二〇番の変奏などシンプルな極ですね。逆に謎めいて聴こえる。

●森 え、シンプルなんですか？

●北沢 音の使い方はとてもシンプルです。無駄なものを削ぎ落としています。

●森 その話は意外でした。若い頃ベートーヴェンの後期の曲が受け入れられなかったのは、シンプルだったか



ベートーヴェンによる『ドン・ジョヴァンニ』の浄書譜

△シンブルな深さ▽

●片桐 パークさん、ピアノを弾く人はまず、モーツァルト、ショパン、ベートーヴェンなんかの曲から「これをやりなさい」とか言われて弾かされるんですね？



「ディアベリ変奏曲」の原版譜

●森 ベートーヴェンはモーツァルトとは違い、だれが弾いてもそれらしく聴こえるように思います。パツハもそうですが、その音楽は非常に構築的なんですね。

●片桐 構築性というのは？

●北沢 でもその構築性を把握した演奏というのは少ないですね。ベートーヴェンの場合はたんに曲の形式や組み立て方がつりしているだけではなく、そこをなにを言おうとしているかを含めた構築性ですね。モーツァルトの場合は曲の形式がすなわち構築性で、頭に響いている音楽を素直に楽譜に描いていけばいいわけですが。ベートーヴェンの場合にはスケッチから始まって、これを入れ、これを変え……と、構築して完成する。そして完成してからも何度も手を加えています。音楽の流れよりも、メッセージの表現の仕方を考えている。

●青木 でもベートーヴェンと一口に言っても、初期と中期、後期ではずいぶん違うでしょう？ ごく初期には

らかも知れません。

●北沢 もちろん内容は深いんですけど、それを表現する手段が、無駄を削りに削ったものだったんです。

●青木 だから、ただ音符を弾いていただけでは彼のメッセージは伝わらないでしょうね。何をここで言おうとしているかわからない。弾くひとがわからなければ、聴くひととはもつとわからないんです。

●片桐 技巧的にはどうなんですか？

●パーク 印象派に近いような流れがありますね。すごく時代を飛び越えてしまっている感じがします。

●北沢 「ディアベリ」は高度に抽象的なんですよ、シェーンベルクにも通ずるような。シェーンベルクと違うのは、抽象性を意図して抽象的になったのではなくて、「ある深いもの」を表現するための抽象性なんです。

●森 「ディアベリ」はとつきにくくて、つい最近になるまで理解できませんでした。

●北沢 そういう意味では難曲中の難曲ですね。

●青木 だから近年まで、日本では晩年のピアノ曲はあ



まり弾かれなかったですね。最初に晩年のピアノ曲をよく弾かれたのは園田高弘さんですよ。

●北沢 プラームスはベートーヴェンが中期に実現したものを継承して、音を増やしたりハーモニーを複雑にしたりした。ベートーヴェンの晩年のスタイル、つまりいい意味で抽象化されてシンプルで、もっと深いものを表現する、そうした面はむしろリストや、ドビュッシー、ラヴェルにつながっていきます。

リストは超絶技巧家だから、『巡礼の年』などはテクニカルな華やかさが加わっているけれど、表現の方向はベートーヴェンが晩年にやろうとしたものの展開ですね。

●青木 ドビュッシーにもベートーヴェンについて書いたものがあります。

●森 ベートーヴェンの後期がリストにつながり、ドビュッシーへ、ですか？

●北沢 中期までのスタイルはシューマンもプラームスも継承しています。でもベートーヴェンの最晩年のスタイルの継承はむしろリストだと思います。

△本質的な意外性▽

●森 パークさんがベートーヴェンの後期作品について弾かれるようになったのは最近ですか？

●パーク 高校生くらいからです。日本にいるときも外国に出てからも、たくさんひとが作品一〇九、一〇〇、一一一を弾いていました。よく取り上げられて、公開レッスンがあったり、友人の家に泊まって弾き合いをして先生に教えられたりしましたが、どうも腑に落ちなくて。

一〇九は短くて、いろいろなものが盛り込まれているというので、コンクールでよく演奏されています。でもそういうレッスンを聴いていて、私はどうもしっくり来なくて。

△普遍的思想としての音楽▽

●パーク ところで、思ったんですけども、恋愛がこれほどまでに重要な位置を占める、音楽に影響を与えているということがたいへん衝撃的だったんです。

私の価値観の中では、そんなにも大切なものなのだと思います。私に思ってたんです。いくら読んで想像力を働かせても、人生をかけるような恋愛っていうのはまだわからなくて。私はこれ弾いていいんだるかと思ったり。

●北沢 それは考えすぎない方がいい。ちゃんと音符にあらわれているんですよ。だから音で深く感じればいいんです。その背後にあるベートーヴェンの恋愛とか一八二一年の旅行とか、背景としては知っていた方がいい。けれども、実際の演奏家としては音の中で、ベートーヴェンの想い、たんに感情の起伏だけでなく、彼自身の深い想い、想いというより思想を感じとる方が重要です。

恋愛はきっかけにすぎない。恋愛にかぎらず生きていく経験の中でより深い世界を発見する契機になればいいわけで、ベートーヴェンはいつもそうだったんですね。それをベートーヴェンは完全に音として表現しています。ですから音を読み切れば、それで彼の体験を再現したことになると思います。

●パーク 「嘆きの歌」が、嘆きつてというのがどういう種類の嘆きなのかわからなくて。私は別のものに置き換えるしかないのかな、と。

●北沢 それでいいと思います。ベートーヴェンは自分の個人的な体験を基礎にして、それを超えた普遍的なものを表現している。たとえば作品一〇〇だと、オルフェ

リこなくて。レクセンで弾いていて「これ以上踏み込みたい」という曲ではなかったんです。いろんな偏見があったんです。とくに二二〇の二楽章の四分の二。どうしてあれが入ってくるんだらう、あの曲に、と。音楽的なことではなくて、自分としては放置していました。でも北沢先生が作品九六のヴァイオリン・ソナタが後期の作品に関連している、とおっしゃったので、その曲を聴いてみましたら何か通じるものがあると感じ、ヒントになりました。

●北沢 ムッターの全曲録音、その最後のヴァイオリン・ソナタ、あれはとてよくて、とくにフィナーレのドラマティックなヴァリエーションは、後期の変奏曲に通ずるすべがあると思います。

●パーク それこそ人間的なドラマが隠されているということに興味を引かれて、もういちど改めて作品に向き合ってみようという気持ちになりました。

●北沢 作品一〇九も一一〇も、第二楽章が四分の二なのにスケルツォなんです。ふつうスケルツォは四分の三拍子なのに。一〇九は確証はないけれども、一一〇は第二楽章の最初のテーマにつづく楽節がシレジア民謡なんです。ベートーヴェンは一八一一年にシレジアに旅行している。一〇九も一一〇も四分の三ではなく四分の二なのは馬車のリズムなんです。この二曲は、彼女たちと一緒にボヘミア、シレジアに行った時の幸福な追憶かもしれない。

●パーク 一一〇でも、この楽章ばかりはどうでしょうか、と迷います。

●森 異質ですよ。

●片桐 そういう箇所があるのはベートーヴェンに特有なのですか？

●北沢 モーツァルトやショパンの場合、展開したり転調したりするけれど、完全な流れがある。ところがベートーヴェンでは、譜面で見ていると「え、なんでここが

ウスの神話を重ね合わせてもいい。「嘆きの歌」というのも、オルフェウス神話に出てくるような、神話的なものにも高めていっています。だから、その深みを感じればいいんです。彼自身の個人的な体験を契機にもっと高いところまで彼は到達しているのですから。

●森 こんど弾かれるのは作品一一二ですよ。

●パーク そうです。一一〇も奮闘中です。やっぱり一一二にいくまでにはわかっていないといけないので。それで一一一から始めたんですけど、一一〇、一〇九まで戻って、一〇九、一一〇、一一一と弾いています。

もともと作品に人類的な愛とか視点とかがあった方だと思っんです。個人的な体験を経ながら、そこへもう一度戻ってくるという、そういう感じがいたします。服を脱いでいって、一〇九から一一〇へと、どんどん脱いで裸になっても裸を通り越していってしまう観点です。そういう発展があります。

●青木 無駄なものなくなっていくんですよ。さっきのお話に通じますね。

●片桐 そういうときも含めて、一般にベートーヴェンは作曲する場合、きわめて集中力を発揮するといわれますが……。

●青木 彼自身が一種、恍惚状態というか、存在しているんだけど、なにも周りのものが見えないし、聞こえない状態になっている、ひとが前にいるのに。だから、作曲しているところをひとから見られたがらなかった。それを見たひとが少ないんだけど、ベッティーナ・ブレンターノが見て、そういう場面を書き残しています。ベートーヴェン自身も、音楽というものは哲学的思考というか、瞑想的思考というか、そういうものを感覚を通して人に伝える、もつとも適した媒体だ。それは文学でも絵画でもなく、音楽だけに許されたことだ、と言っています。彼の極度の集中力がそれを可能にしたんでしょうね。

こうなるの？」という意外性が絶対にあるんです。しかし聴いていると、その意外性がないと逆に曲が成立しない。最後の絃楽四重奏の Es muss sein (こうでなくてはならない)ですよ。後期の曲だけが意外な転調をするのかと思いましたが、初期の歌曲にもあります。転調だけではないんです。

●青木 なぜ彼が、そういう方向性をとったのか。そこを読み取らなくちゃいけないんですからたいへんですね、演奏家は。

●北沢 パークさんがおっしゃったように、これらの第二楽章にもたしかに違和感はあるんです。なんでこんなところにスケルツォがあるのだろうか、と。

●片桐 そういう違和感があるとき、奏者としてはどう対処するんですか？

●パーク 違和感があったり、飲み込めないものを人の前では弾けないので、どうにかしなければ、という考えが働くんですけど、つじつまを合わせるのもよくないかな。やはり下地というか背景、裏付けるものを手にいれないと私は弾けないです。

最初は言葉でないと、音の中から探っていく。その後からは自分が手に入れられる知識とか、歴史的なこと、楽理的なことから探ります。知ってわかる部分もあります。それでもやっぱりわからないものもあります。そのときわからないものは、時間が経つのを待つことでもあります。ずっと弾いていて、生活をしながらずっとと——それこそ私はいま、寝ても覚めてもピアノのことを考えているのですが、生活の中でわかっていくこともあります。あため、熟成していく感じですよ。

●青木 わたしがベートーヴェンの『日記』の翻訳の仕事をしているときの感じに似ています。謎みないな文章がぼつりぼつりと出てくるんです。それをなめらかに日本語にしてしまうと本質から外れてしまう。あまり感情移入して自己流に解釈しすぎてもいけない。でもどうし

△先入観をすてること▽

●片桐 最後に青木先生と北沢先生にお願いしたいのですが、これからベートーヴェンを聴いたり、演奏したりする人々にメッセージを送るとすれば、どのようなことでしょうか？

●青木 私は偏見をもたないで聴いてほしいってことです。私も自分の見方を押し付けることはせつたいしたくないし、それは私の見方で、いろんな見方があっていいと思ってるんですけど。いままでの偏見があまりにも強すぎたから、偏見やそれこそ無駄なものは剥ぎ取って、自分の感性で聴いてほしいっていうのが私の望みです。

●北沢 ベートーヴェンの曲に対して自分なりのイメージなり解釈がありますけれど、それはわたくしのイメージなり解釈であって、ひとに押し付けようとは頭固くない。本当にいい演奏を聴いていると、あつこんなところがあったのかという、毎回新発見があるんですね。弾くひと、聴くひとそれぞれ新鮮なベートーヴェンが発見してほしい。いままであまりにもベートーヴェン像が偏っていて、ベートーヴェン演奏かくあるべしという偏見、先入観で凝り固まっていたから、それをまず打破する。それさえ打破すればね。あとは自由に解釈してほしいと思います。

●青木 自由に徹していると、ベートーヴェンですごく奥が深く、聴きたびにこういうところがあったのかと、次々と新しいものが見えてくる。年齢にもよりますが、体験にもよりますが、若いとき見えなかったものが見えてきたりします。

●片桐 どうもありがとうございました。



健康と生命の尊厳に基づく美への視点 大内秀明

今年もまた春が近づいてきた。春の早い伊豆の便りが、テレビで放映される。まだ雪の残る東北の仙台に住んでいると、この頃だけは伊豆高原の春の自然が、とても羨ましい。

伊豆高原のセミナーハウス「ヴィラ・マーヤ」の合宿研究会にお招き頂いたのは、二〇〇九年の一月の終わり、もう梅の花は満開、早咲きの桜も開花していた。伊豆の春の暖かさを感じ、さらに青木やよひさんの温かいお迎えを受けて、雪の仙台から新幹線を乗り継いで「ヴィラ・マーヤ」にやってきて良かった、と実感した。

夫君、北沢方邦さんとは、一九八〇年代からの長い付き合い合いだ。しかし、青木やよひさんについては、何一つ話して頂かなかった。また別に聞いたこともなかったが、音楽や女性問題に大変活躍されている事は存じ上げていた。電話で二度か三度、言葉を交わした事があった様に思う。それだけに研究会での初対面の場に、やや緊張して臨んだのだ。

研究会の報告は、「人間にとって労働とは何か——モリスと賢治」だった。数年前、仙台・作並温泉に別荘を開放「賢治とW・モリスの館」を始めたので、その紹介をかねてモリスから宮沢賢治へのアーツ&クラフツ運動の流れを報告させて頂いた。二日に亘る長時間セミナーで大変有難かった。

まさか、このセミナーでお会いしたのが初めてで、お茶目な少女の弾んだ声 片岡みい子

青木先生と話していて、「声が一番魂に近い」ことを実感した。クリアな声と滑舌のよさは清明な文章につながる。北沢先生の自伝「風と航跡」には、鏝広帽子でワンピース姿の青木先生が登場する。爽やかなイメージだ。

一九七〇年代終わりから、お名前とご活躍だけは存じ上げていたが、村上光彦さん経由で八〇年代半ばに私の連合会(故・正垣親一)の乳酸菌飲料の顧客になられ、九〇年代終わりに代々木の事務所にお運びいただいた折に初めてお目にかかった。その後時々電話でお話したが、私の老母や私自身の体調を気遣ってくださり、的確なアドバイスをいただいた。二〇〇九年十一月の伊豆高原でのセミナーがお目にかかった最後となったが、私は先生を前に涙がとまらなかつた。

お元気な頃、皆と話していて興が乗ってくると青木先生の声は弾んだ。大きな謎に挑戦するお茶目な少女のよくな声になる。ずっと、その弾んだ声のそばにいたかった。

ホスピタリティー 片桐 祐

ああ、楽しかった!と玄関の扉を開くなり、わたしは喜色満面と思わず漏らしたらしい。こちらは無意識だから覚えてないが、家人は今なお恨めしそうに間違いないと断言する。たしか二〇〇五年の夏、伊豆高原の北沢・青木先生宅に泊めていただいて、夜も更けて帰宅したときのことだ。そりゃ楽しかろう、なにせ、話題は芸術全般におよび、著名人物の実話が酒の肴にころころと尽きることがないのだから。

じつは、その前半、同じように一人で伊豆高原におじゃましたのに味を留めて再度訪れたのだった。その第一回目のこと、もちろん数時間で帰るつもりが、ご夫婦して、

れが最後になってしまおうとは、考えもしなかつた。ご病気である事は聞いていた。お会いして、お顔の感じでは、それほど悪いとは思えなかつたし、それに私の報告を熱心に聴いて下さり、更に討論にご参加頂いた。ペーシックインカムについて、鋭いご質問だったと記憶する。すぐにお元気になるだろう、と感じた。

〇七年秋、「賢治とモリスの環境芸術」を上梓したが、何時もご高著を頂いている北沢さんに、一冊贈呈した。ところが青木さんが、大変丁寧な書評を新聞に書いて下さった。思わぬご厚意に感激し、礼状を書いたが、たしか伊豆高原の「ヴィラ・マーヤ」と仙台・作並の「賢治とモリスの館」との連帯のエネルギーを送らせて頂いた、と記憶している。

環境芸術の内部に、人間の健康や生命の尊厳に基づく美への視点、北沢・青木ご夫妻から頂いたものだ。その視点はまた、壮絶な病魔との闘いから生まれたものではなかつたか。「ヴィラ・マーヤ」の研究会の折の青木さんのお姿を偲びつつ、はるか仙台・作並の「館」から感謝の言葉を送り、ご冥福を祈りたい。

陰陽バランス 大東愛子

青木さんとのご縁が出来たきっかけは「リサーチエンス」という英国のエコロジー雑誌に掲載された物理学者フリッチョフ・カブラの「陰陽バランス」という短い論

えー!泊まつかないの?こまできて帰るのは可笑しい!すぐ奥さんに電話して!と大合唱。とてつもなく嬉しい誤算で、その晩はずうつとおしゃべりが続いた。わたしは驚いた。初めて訪れた一介の朴念仁を、徹頭徹尾もてなす、その接待ぶりに。それも、ときに夫婦の丁寧な議論が入り込むから、どう考えても、普段の夫婦にわたしが偶さかおじゃましたという風情にしか見えない。けしてよそ者でないという居心地がある。最上の、最良の接待とは、このことをいうのだろうか。

まるで、西部の荒野の一軒家でお目にかかれそうなホスピタリティーだった。いうまでもなく、その根源には夫婦の階調がなくてはならない。そう、日が暮れると、のそつと出没する超大型の家グモが、安心して壁に張りついていられる、階調がなければならぬ。わたしにとって、伊豆高原では、あくまで青木先生は北沢先生とセットである。「そうね、そうね」「あたしは、ちよつと導うな」「あのひとつたら、おかしいのよ」、こういう青木語録は、そのセットの絶妙の間合いから生まれるからこそ、あの家自体が共鳴板になるような、不思議な響きがある。忘れられぬ響きである。

やよひさん、ありがとう 坂本喜久子

青木やよひさんが逝かれてから、もう四ヶ月余りになります。

四十数年前に私が石神井に生まれてから、何度お宅に伺ったことでしょうか。それも娘を連れて一家でお邪魔していました。やよひさんのお母様とレック(やよひさんたちの愛犬レックス)に娘をお願いしておいて、私たちはお食事をいただきながら、北沢さん、青木さんと夜遅くまで、お話の途切れることがありませんでした。大学を三年で中退して、渡米して、ずっと米国で学生

文を通じてだったように思う。一九八二年頃のこと、当時の私はエコロジー団体に関わっていた。そのころあった集会での「フェミニズムとエコロジーを車の両輪にして、今とは違う社会にしていこう」という趣旨の発言は今も新鮮に耳に残っている。青木さんのこの立場、この思いはその後ずっと変わることはなかつた。

「呼べど答える声なきときは我一人行く」というタゴールの詩の一節に、自分で節をつけて歌っていたのは西尾昇さん(仏のエコ運動など紹介、一九八六年没)だった。この頃、私は西尾さんともエコロジー運動を通じての交流があった。お二人とも、エコロジストという枠にはおさまらない、より深いもの探求しつつ生き抜かれた方たちだった。「青木さんと話してみたい」という西尾さんの願いを青木さんに伝えると、青木さんはガンで自宅療養中の西尾さん宅まで足を運んでくださった。あの「エコ・フェミニズム」があったのは、その後のことだったと思うが、あの頃のことを思い返すとき、私の脳裏にこのタゴールの詩の一節が浮かんできた。

「今の時代は心配だ。六〇年安保の頃のことなど言い残しておきたい」と亡くなる半年前に言っておられた。米国防務省によるイラク攻撃前、新聞にイラクの戦争を止めようとの意見広告を呼びかけ、多くの賛同を得て実現したことも語っておられた。電話での会話をすぐに実行に移されたようだ。青木さんを語る時、女性・エコロジー・ベーターヴェンに加えて、平和への強い意志と行動力も忘れてはならない気がしている。

生活をしていった私は、日本の社会情勢などに疎く、ほんとうに知らないことばかりでしたから、やよひさんのお宅でのお話合から学ぶことがどんなに多かったことか、今でもその頃のことを考えると、胸がわくわくしてきます。

私の生涯で、家族の外で成し遂げたこと(オーバーな言い方ですが)が二つあります。どちらの場合もやよひさんが背中を押してくださいました。

いつも背中を丸くして、うつむき加減に歩いていらっしやるやよひさんを始終お留めして、道端で、いろんなこととの相談に乗っていただけておりました。そのときは、六〇年安保直後のことで、ご近所の奥様方をお誘いして、読書会を開こうとしていました。石神井に来て、あまり日も経っていないのに、こんなことをしても……と、話し始めましたら、やよひさんが「いいじゃない、すばらしいですよ」とあっさり言ってくださいましたね。それで、すぐ、ご近所を二軒ずつ回り、「選挙のとき、どの党に投票するにしろ、私たち女性が自分で判断できるように、ごいっしょに勉強しませんか」と大きなことを言ってお誘いしましたところ、三十人近くの方が集まりました。

我が家では狭いので、その後、第一勧銀の二階の和室を借りて、毎月第二火曜日に集まりました。小さい子どもたちもいっしょでしたから、国会へのデモにも子どもたちを連れていきましたし、ソワイエト大使館に核実験反対の私たちだけのデモをしたときも、子どもたちがいっしょでした。アポイントメントを取るなどということも知りませんでした。門の前で飛び跳ねている子どもたちを見た大使館の女性が屋内に入れてくれ、戦争中の両国の女性の状況などを話し合いました。広い部屋にたくさん置いてあるソファの上を跳んで歩いて、楽しんで子どもたちは、その後何度も、「今度はいつソワイエト大使館に行くの?」と聞いたほどでした。また、石神井の児童施設の子どものための、入学前の身体検査に間に合うよ



うに下町で下着を買って、みんなでかついで来たこともありました。

この会は五十年近く続き、最後は五人だけになりました。その中のお二人が昨年なくなられ、ほかのお一人は老人ホームです。ご近所にただ一人残られた九十五歳の方は車椅子でのご生活ですが、昔のことなど明瞭に話されています。メンバーの方たちから広く、深く教えられ

るごの多かつた読書会でした。

もう一つは、日本に住む外国人に日本語を教える勉強をしたあとで、小さい子どもを抱えて、費用のかかる日本語学校へ行けない方たちのために、ボランティアの日本語教室を始めたばかりの頃でした。そのとき、外国の大学や、区の公民館などから講座をというお話があり、どうしようかと迷っていました。そのとき、また、道でやよひさんをお留めして、どうしたらと、うかがうと、いとも軽やかに「両方なさつたら」と言われて、あっそうだと思います。それから時間のやりくりをしながら、両方続けてきました。石神井のボランティア日本語教室を始めから二十年になります。その間、八百人を超す、五十数カ国からの方たちが日本語を勉強していきま

います。十六人のボランティアと教室を続けています。

どちらの場合についても、やよひさんにお目にかかるたびに、その後の状況などをお話すると、熱心に聞いてくださいました。何よりのサポートでした。

それから、やよひさんに相談もしないで、私たち夫婦に万一のことがありましたら、子どもたちをお願いしますと、遺言状に書いたことをお話ししましたとき、私をじつとご覧になって、「はい」と言ってくれました。あよかったと、どんなに安心したことでしょう。

やよひさん、ほんとうにありがとうございました。もっと、もっと教えていただきたかったのに、伊豆へいらしてから、数えるほどしかお目にかかれませんでしたね。でも、いつも、やよひさんが背中を押してくださって

のでした。

すぐれた歴史家、青木やよひさん 篠原 一

久しぶりにお会いしたのは、二〇〇八年十一月のはじめ、「知と文明のフォーラム」の招きで伊豆高原のセミナーハウスを訪れたときだった。大腸ガンを患ったときいていたが、そういうことを思い出させないくらい普段と変わりなかった。八十を過ぎてから急に足腰が弱ってしまつたと私が言うと、軽々とヨガをして、その効用を教えてください。そのときはガンのことはほとんど語らなかつた。ヨガをやっていたせいか、術後の回復が早かつたということも聞いて、少し安心していった。青木さんは徹底した有機栽培食品主義者で、蕎麦についても、全国から有機栽培の品を選んでいるという話であったが、昼に出された有機栽培のうどんはシンプルでおいしかった。

たしか大腸ガンの手術をしたのは五月ということだったので、ちょうど一年たった二〇〇九年五月に心配になつて、私にはめずらしく手紙を書いた。あまり人の病気に干渉しないことにしているのだが、どうも胸騒ぎがしてならなかつた。案の定、すぐ青木さんからくわしい病状の報告があり、病状が悪化しているとされたのち、「先生のお立場からご教示頂けることがございましたらお聞かせくださいませ」とあった。

ガンから自分の身を守るためには、いわゆる「標準療法」つまり手術、放射線、抗ガン剤だけでなく、代替療法をふくめて、自分なりにもっともよい治療法を考え、相互補完的に対処しなければ、ガンのような大敵にはとうてい対抗できないというのが私の考えで、そのことのために、かねてから「基本療法」の一つとして丸山ワクチンの使用を主張してきた。二十一世紀になって、免疫革命とでもいうべきものが起つて、人間の皮膚の一ミ

るのを感じています。

「生きている」青木さん 坂本義和

あれは、どの映画だったろうか。砲撃と爆撃で一面に塵埃と化したコンクリートの瓦礫の中を、数人のドイツ兵が歩いて進んで行く。その一人が、崩れた家の間に、不思議にピアノが立っているのを見つめる。彼は、銃をおろし、シヨパンのノクターンを弾き始め、途中でハタと打ち切つて、再び銃を手に歩いて行く。

私は、瓦礫の中で響いたあの信じられないようなピアノの美しい音に、醜悪な戦禍の中でも、人間が美しさをもちうることを聴いて、全身が感動に凍える思いでした。殺戮と破壊が続く中で、人間だけがもつ光を与えてくれるもの、それがあの音楽でした。音楽が、人間を信じさせてくれたのです。

はじめて青木さんにお会いした頃、若い青木さんは片山敏彦さんを助けながら、ロマン・ロランの全集を出すことに、全力投球をされていました。「苦しみ、闘い、ついに勝つべき、あらゆる自由な魂に捧げる」というロランの言葉は、私にはまばゆい、まばゆ過ぎる献辞でしたが、青木さんは、それに賭けておられた。

ロランの「ペートルヴェンの生涯」もそのひとつであり、それに強く惹かれたに違いありません。しかし、おそらく、ペートルヴェンを、最も優れた意味で「英雄」として描くロランに、何か違和感をもたれたのではないのでしょうか。これは、私の想像に過ぎませんが。

青木さんの「ペートルヴェンの生涯」には、敬愛する人間に同行する筆者の、自分に対する執拗な厳しさと、ペートルヴェンへの冷静で繊細な優しさとの、豊かな香りが感じられます。

青木さんは、「いのち」を愛した人だったと思います。

リ下に自然免疫群があることがわかり、この免疫の構造と機能が明らかになってきた。特にこの自然免疫群の中に、樹状細胞というものがあつて、それが中心になって自然免疫活動を活性化し、またこれまで認識されてきた獲得免疫に指令をだしてガンにあたるということが判明してきてきた。そしてこの自然免疫群を活性化するのが丸山ワクチンであることが認められるようになっていく。しかし医師の偏見がまだ強いので、いまなお丸山ワクチンを拒否する医師が多いが、これはかならずしも科学的とはいえない。

そういう趣旨で、もし青木さんが希望されるのなら、また担当の先生が認められるのなら、丸山ワクチンを隔日に打つことにしてはどうかという手紙を書いて投函した。丸山ワクチンは特効薬というふうなものではなく、免疫を活性化する、いわば基本療法だから、打つとしたらもっと早く打つべきもので、正直言っていま打つのは治療のためとしては遅すぎると思う。しかしガンと共存して、少しでも長く生きるといふ考えに立てば、それは意味のあることではないかと書いたような気がする。青木さんは、もう十分生きて八十二歳にも達したのだから、いま執筆している「ペートルヴェンの生涯」が書き終えればよいのであつて、そんなに生きながらえることは毛頭考えていないといつていた。私など凡人には及びもつかない達観だと思ふ。それならなお共存すればいい、共存してほしいと願うばかりだった。やがて、主治医の先生のごころよい了解をえてワクチンを打つことになった。

そのころから、また青木さんの「ペートルヴェン論」を読み返していた。私も歴史家のつもりだが、青木さんの歴史探求のエネルギーはすばらしい。ペートルヴェンの不滅の恋人がアントニア・プレンターノだという証明は説得力があり、資料では証明できない推論の方法も鮮やかであつた。外国史の領域でこのような実証をすることは容易なことではない。青木さんはすぐれた歴史家であ

余談になりますが、どちらも家が石神井で近くにあるため、同じ電車から降りて駅を出た時のこと。北沢さんが散歩がてら、レックスを連れて迎えてこられ、つながらないまま、その側をおとなしく歩いてきたレックスが、青木さんを見ると一目散に走つてきて飛びつき、顔をなめ始めました。立ち上がると青木さんと同じ高さのシェパードが、いきなり女性に飛びついたので、まわりの人は噛みついたのかと目を見張つても、怖く手が出せない。ところが肝心の女性は「ハイハイ、よしよし」と顔をなめさせている。事情を知っている私は、恐怖に襲われた周囲の人々の表情を見て、おかしうて仕方がなかつたのを覚えています。

青木さんには、怒りや義憤があつても、シニシズムはありませんでした。著書「ゲートとペートルヴェン」を贈呈された後、会う機会があつたので、「青木さんのゲートには、メフィストフェレスは一度も出てきませんね」と言いますと、ちよつと困つた顔をされました。青木さんのゲート観の、優しさの現れでしょう。

思えば、六〇年安保の時、近くの小学校講堂で、満席の地域集会があり、その帰途、初めて青木さん・北沢さんにお会いし、夜道を歩きながらお話をしてから、五十年が経ちました。その間、わが家の二人の娘をはじめ、家族ぐるみでお世話になりました。

昨年十一月の半ば、電話をくださり「北沢がよくしてくれ、医者にもとても恵まれています」と言われた後で、「こういう病気をして、ますますペートルヴェンがわかるような気持ちになりました」と加えられました。あの声は、今も私の耳に残っています。

「十二月には本が出ます」と言われたのに、刊行を見ずに終わったことは残念なようにも思われますが、私は遺著「ペートルヴェンの生涯」を、それに自分の「いのち」を彫り込んでいた「青木やよひの生涯」と二重写しに読みながら、二つの人生の達成に頭が下がる思いに沈んだ。このような実績の上に立てば、ユニークな伝記が書かれるにちがいがいないと、出版の日が楽しみであつた。そんなとき、青木さんの計報が新聞にのつた。深い落胆とともに、新著の進行具合が心配であつたが、あとかきの日時十一月とある新書が死去の日とほぼ同時に出版された。贈られてきた遺著の間には北沢方邦さんの伊豆高原日記が挟み込まれていた。十一月二十四日主治医のご配慮で外泊帰宅をしたという。書齋がみたいというので、背負つて案内したが、やせ細つているにもかかわらず、腹水のためかおもかつたという北沢さんの文に思わず涙を流した。青木さんがこの世を去つたのは、翌日夜九時十一分のことだった。

ペートルヴェンは、激しい雷鳴と稲妻の中で、右手の拳を高く掲げながら死んでいった。これにはいろいろな解釈があるらしいが、青木さんによれば、ペートルヴェンが高く掲げた拳には見えない指揮棒が握られていたのではないかと、そのとき彼の脳の中で自分の交響曲が鳴り響いていたのではないかと。それは第九か、あるいはまた脳の中で書かれるばかりになつていた「交響曲第一〇番」だったか。

青木さんは意識の薄れていく間の中で、何を考えたのだろうか。念願の著書を書き終え、病んではじめてしまった楽聖ペートルヴェンの苦悩を回顧しながら、ペートルヴェンより静かで、おだやかな死をむかえられたのではないかと。

青木やよひさんの「NO」と「YES」 杉山専子

私が初めてお目にかかつたのは一九八九年、東京大学で「フェミニズムとエコロジー」というゼミの講師をされていた時です。青木さんは学生の発言や質問に一つひとつ真剣に耳を傾け、ユーモアも交えながら理路整然と





お話され、当時助手として大学教員を目指していた私は、青木さんの明晰さや行動力、正義感、そして暖かい包容力に大きな感銘を受けました。近代主義の代案としてのエコロジカル・フェミニズムが保守的な男女役割分担を美化してしまうのでは、という疑問に対して、男女平等は人権としてももちろん要求していくべきで、それと同時に現状批判だけではなく代案を出していくことが必要と答えられたことが印象的でした。おかしいと思ったことには毅然として否と言う。でも青木さんの「No」の先には、すべての人を包み込む大きく温かい「Yes」が感じられるのです。

青木さんの理想とする社会の実現が遠のく一方のようにも思える今日、自分ができることは何なのか。学者として教師として、一人の人間として、自らの非力を思い知る日々です。こんな時青木さんなら何とおっしゃるかしたら、お電話で伺ってみたいなどと考える自分に気が付きます。

最後の立派な著書を仕上げられて心静かに亡くなられたことで、残された者は納得すべきなのでしょう。最後まで怒りのエネルギーと大きな愛を持ち続けられた青木さん。長い間、私を助けてくださってありがとうございました。

青木先生と共有するベートーヴェン 寺本倫子

私が青木先生と初めて出会ったのは、一九九九年末でした。私は、幼い頃からベートーヴェンが大好きで、そのことで知人が紹介して下さったのがきっかけです。初めてお会いしたときは、ベートーヴェンの後期のピアノソナタや、弦楽四重奏曲について話しました。私は、特に後期の作品が大好きというか、最高傑作との思いが強かったからです。青木先生は、すぐ様「あなたと五分も

時々の世界の話と一緒に語り合ってくださいました。私が関わっていたオリンピック反対運動の話やヨーロッパでの貧乏旅行の話や、著書に（数行であるけれど）書いてくださったのは、私にとっては何だか不思議でうれしい出来事だった。

青木先生のお名前を初めて知ったのは、学内サークルの学習会でエコフェミ論争を扱った時だったから、私にとっては当初エコフェミの青木先生という印象が強かった。しかし、当然のことながら先生のお宅での話はフェミニズムのことだけでなく、日常のことから哲学的なテーマまで様々な分野にわたり、そのようにいろいろなレベルで話ができただけでなく、学生である我々にとって幸せなことだったと思う。フェミニズムの学習会とは直接関係のない北沢ゼミでも、青木先生を慕う学生は何人もいて、「俺は青木先生に会うために伊豆に行くんだ」という者もいた。

失礼を承知で言わしていただく、青木先生はとてもチャームキングな方だったと思う。そして先生の最大の魅力の一つは声だった。先生の若々しい張りのある声は、最後まで続けておられた精力的な執筆活動をそのまま象徴するかのようだ。そしてその声に私たちは大きなエネルギーをいただいた気がする。鳥のさえずりのような先生の声は、軽やかな笑い声とともに、今でもはっきり私の耳に残っている。

青木先生どうぞ安らかに眠りください。そしてその暖かいまなざしで我々北沢ゼミの面々のこともどこかで見守っていてください。

鍼灸師からみた青木やよひさん 吉田乙恵

青木やよひさんに私がお会いしたのは約十五年前、レディース専門の鍼灸治療室を開業してからです。「伊

お話していたら、あなたがとても深いレベルでベートーヴェンを理解していることがわかりましたよ」とおっしゃり、すぐに、伊豆高原のご自宅へ招待して下さいました。その気さくさには感激極まりありませんでした。そして、二〇〇〇年お正月早々に、伊豆高原のお家を訪問し、先生とお話をし、ご主人の北沢先生の手料理（これもまた傑作！）を頂いたことをよく覚えております。ちょうど、私は、二〇〇〇年三月に、ベートーヴェンゆかりの地を巡る旅行が決まっていたところでしたので、強い縁を感じました。以後、青木先生と交流をさせて頂きました。

今度、六月に演奏されます「ディアベリ変奏曲」は、私にとっては、ベートーヴェンの最高の贈り物と思っております。第三変奏の、まるで現代にも通ずるようなリズムカルなフーガ、第三変奏の、もう、手の届かない世界。私は、アマチュアですがピアノを弾き、一昨年、三二、三三、三三変奏を発表会で弾きました。言葉にはならない程のベートーヴェンの愛情を満喫しました。青木先生に心から感謝するとともに、いつも私の心の中に生き続けております。

「ベートーヴェンの生涯」 森 淳一

私は青木やよひ先生の最後の著作「ベートーヴェンの生涯」（平凡社新書）の編集を担当させて頂いた。ここでは、その秘密なお仕事ぶりの一端を書き記したい。

私が最終的にお原稿をいただいたのは二〇〇九年の八月。加筆訂正も済んだ、ほぼ完全原稿と思われた。ところが、初校を出す前に、訂正で真っ赤になった第一章が送られてきた。続く第二章から第五章の初校にもおびただしい赤。完璧さを求める青木先生の意志の強さに驚く。言葉遣い一つひとつを点検し、読点の打つ箇所を注意深

豆高原ゆうゆうの里」に入所されていたお母様の訪問の帰りに看板を見て、突然、予約なしでフラッと立ち寄られたのが最初でした。

その初診での事、まず、いつも通りに問診から入りました。問診から治療まで、一人に約一時間の時間をとっています。私が、やよひさんは、腸に憩室があり時々出血があるという持病の事、農業による水質汚染で身体が侵された事など、たんとんと静かに、強く、そして怒りを込め、話し始められました。

しっかりとメモを取りながらお聞きしていたのですが、気が付けば、すでに一時間が過ぎていました。やよひさんはほぼ全て話し終えられたようで、満足された様子でしたが、私は問診に長く時間を取りすぎて、少々慌てました。続けて、東洋医学で行う切診のひとつ、脈診に入りました。脈状は、沈・緊・遅——漢方という裏証・寒証・虚証でした。腹診は、全体に力なく心下（みぞおち）に少々緊張あり。望診では、細身、目の力はあり、全体的に黒っぽい顔色。他、若干、力の無い声、気の不足、お血（オケツ）あり（私の診るところ、完全に虚証です）、という印象でした。

十五年程前の事で、その時の一番の主訴は何だったのかは忘れてしまっていますが、問診が長かったこととあり、初診の日の様子はとても印象深く心に残っております。特に脈は、私が診た患者さんの中では一番弱い脈だったので、今でも指先は覚えております。

私の治療と相性が良かったのか、それから都合のつく時は、一週間に一度の間隔で通院していただきました。大腸の表裏関係でもある肺経で気の巡りをよくし、脾経・胃経の気を補う、基本的な治療を中心に行いました。治療後の脈は緩脈（病状の回復）となられ、憩室の出血がひどい時もありましたが、確か二三年過ぎた頃からは、ほぼ安定した良好な状態になられたようです。

く変更する。まさに作家のお仕事だと実感した。そして、これだけの赤字を入れられる体力が残されているのだから、先生の病状は半分維持されるだろうと考えた。

しかし九月と一〇月のお仕事の重なり具合は、健康な人間でも消耗するほどのものだった。本文再校の校正、注の原稿執筆、年表・索引の点検……。この二カ月間のお仕事だけでも、先生のお命を縮めるに十分な重労働だったのではないかと、悔いが残る。

チャームキングな青木先生 森 宏徳

伊豆高原駅から桜並木を抜け、迷路のような別荘街をおぼろげな記憶を頼りに坂を上っていくとめざす北沢・青木邸に到着する。私が所属していた信州大学の北沢ゼミでは、一年に一度先生のお宅（当時は先生方が別荘として使っていた）に集団で押し掛け、思う存分飲み、語るという、今から思えば本当にありがたい旅行が恒例となっていた。

青木先生に初めてお会いしたのもその会でのことだった。腰裏をつけマスクをした木の人影とアフリカのお面が見守るリビングで、青木先生は北沢先生とともに、我々学生に深夜まで付き合ってください、ホビの話や身体の話、そして編集者時代の話を聞かせてくださいました。また、我々のとりとめない話を熱心に聞いてくださり、その

当時から、虚証体質であられるのに秘めたるパワーをお持ちで、精神力の強さには感心しきりでした。治療中はお母様との関係や仕事の話などもされ、ある時は、女性誌にご夫婦で載られた記事を見せて下さいました。

夫婦別姓のことや旦那様のお話もされました。「彼は生き字引。聞けば何でもすぐに答えてくれるんです」とか、「彼の料理は凝り性で、本格的なんですよ」など、控えめに誇らしげに……。私にとって、羨ましい話ばかりでした。余談ですが、ある年の、我が家の恒例である地元八幡野神社への初詣の日のことです。少し離れた所から、お話ばかり伺っていたご主人を初めてお見かけしたのですが、腕を組み、にこにこ楽しそうな会話をされておられる幸せそうなお二人に、お声をかけそびれてしまったことなども思い出します。

それから数年後、体調を崩してしまっただけは閉院せざるをえなくなり、情けないことに自分が療養生活に入りました。それからも気に掛けてくださり、復帰を期待してくださっていたやよひさんの脈をまた診る事無く、お別れとなってしまう心残りです。

ただ、十月、最後になってしまったセミナーの欠席を手紙でお伝えした折に、「女性として、人としての生き方をとても尊敬しています」と書いた私の言葉を受け止めてください、後悔なく良かったと思っております。

患者さんと鍼灸師という関係でしたが、逆に私の心に沢山の刺激をくださり、やよひさんとお会い出来たことは、私の誇りです。ありがとうございました。感謝を込めて心からご冥福をお祈りいたします。

文中では「やよひさん」と呼ばせていただきました。

「知と文明のフォーラム」二〇〇九年度セミナー報告

フォーラムでは、過去一年間に三度のセミナーを開催しました。熱気の横溢した最後の「生殖倫理セミナー」はもちろんのこと、それぞれに充実した内容でした。ブログに投稿していただいたり、新聞に発表していただいたものを以下に再録しました。

二〇〇九年

●四月二五日 第二回セミナー / レクチャー・コンサート(世界音楽入門Ⅱ)

「新実徳英の世界…螺旋をめぐって…生命の原理」

講師：北沢方邦、杉浦康平、新実徳英 / 演奏：長尾洋史、永井由比、寺岡有希子、上森祥平、上野信一、フォニックス・レフレクション
会場：セシオン杉並

いわゆるクラシック音楽ファンにとって、現代音楽というのは遠い存在である。かくいう私も、日頃聴く音楽はせいぜいベルク止まりで、まして日本の現代音楽を聴く機会はほとんどなかった。考えてみればこれはおかしな話で、私と同じ現代を生きている日本の作曲家が何を考え、何を表現しようとしているのか、当然興味を持ってしかるべきなのである。

これは音楽を聴く姿勢に問題があるのだろうか。何を音楽から得ようとするかということである。美しさや快さのみ求める態度からは、現代音楽への道筋は見えてこない。いや本当は、古典派音楽でもロマン派音楽でも、作

曲された当時は時代との闘いであり、そこから数々の名作が生まれたに違いないのである。

モーツァルトのオペラは、バロック・オペラとは決定的に違う。音楽そのものが構造的・立体的になり、それは例えば「フィガロの結婚」などにみられる複雑な人間関係を描く強力な手段を提供している。またその背景に、十八世紀後半の市民階級の勃興という社会・経済的な事情があったということは間違いないことだろう。

ヴェルディのオペラは、十九世紀の国民国家形成の時代を抜きには考えられないし、ワーグナーのオペラは、その時代の革命精神と無縁ではないだろう。また、第一次世界大戦での悲惨な体験がベルクの『ヴォツェック』を生んだともいえる(このあたりの、音楽と社会、あるいは時代精神との関わりについては、『北沢方邦 音楽入門(平凡社)に詳しい)。

私自身が音楽に求めるのは、美しさや快さだけではなく、それらを含めた、時代を超えた普遍的な価値——「人間の真実」とでも言えはいいのだろうか。しかし音楽を聴くにあたって、そんな観念的なことを考えているわけではまったくない。好ましい音楽か、そうではない音楽か、というだけであり、結果的にバッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ヴェルディなどを聴く機会が増えたというに過ぎない。

十二音楽以降の現代の音楽は、時として面白いと感じるものの、感動とは異質のものであり、敬して遠ざけてきたというのが偽らざるところである。ところが、知

●六月二八日 第三回セミナー / 公開シンポジウム(食料・身体性・環境セミナー2)
食の現状・農の未来
パネリスト：安田節子、植田敬子、片柳義春
司会：北沢方邦
会場：北沢タウンホール

経済学や生産者の視点を交えて提起するシンポジウム「食の現状・農の未来」(主催は知と文明のフォーラム)が六月、東京で開催された。

集会ではパネリストに安田節子さん(食政策センター・ビジョン21)、植田敬子さん(日本女子大学教授・ミクロ経済学専攻)、片柳義春さん(参加型農場・なないろ畑農場運営)の三人を迎え、北沢方邦さん(知と文明のフォーラム代表・構造人類学専攻)が司会を務めた。

安田さんは「六十兆の細胞からなる私たちの身体は私たちが食べたものからできている」と語り、農と食のあり方の激変による健康への深刻な影響を指摘した。日本では一九八一年からがんが死亡原因の一位になった。「豆腐などに使われたA.F.2という発ガン性の強い殺菌剤が、日本でのみ九年間も許可された。この例が典型だが、多くの添加物が六〇年以降に認可され、加工食品が工場で大量生産された。農薬・化学肥料を多投する近代農法もこの時期に始まり、畜産業の過密飼いと続いた」と振り返った。加えてWTOによる農産物自由化圧力などグローバルな市場競争による弊害を述べ、「食料の国内自給は可能。農薬、化学肥料、GM(遺伝子組み換え)食品の使用を止め、伝統の種を守る。これは今、日本だけでなく世界中で緊急に必要な重要な政治的課題」と主張した。

植田さんは経済学の観点から有機農業とCSAの意義を説いた。「米国も日本も、一人あたりの所得は年々上がってきたが、幸福度は米国では六七年以降から逆に低下し、日本も五七年以来低いまま」と図を示して語った。分析によ

と文明のフォーラムが主宰する、昨年の「西村朗の夕べ」といい、今年の「新実徳英の世界」といい、そこから受ける感動の質は、クラシックの巨匠たちの音楽から受けるものと異なるころはなかった。

今回演奏された新実徳英の作品でとりわけ印象的だったのは、『ピアノトリオ・ルクス・ソレムニス』である。あの、心の底から沸きあがってきた感動は、いったい何に触発されたものだろう。明瞭なメロディーが聴かれるわけではなく、際立ったリズムが感じとれるわけでもない。しかし、闇のなかから立ち昇ってくるような、いわく言いがたい抒情。西欧の楽器で奏でているながら、西欧の音楽からは絶えて耳にしたことがないような響き。音が光のなかに密かに立ち現れ、静かに渦を巻き、それが少しづつ高みに昇っていく。高みで音は緊張感のなかに持続して、エネルギーそのものと化す。圧巻だった。ピアノ、ヴァイオリン、チェロ、三つの楽器の奏者の腕は確かだ、彼らの奏する音は、まるでこの世のものとは思えないような響きであった。

新実は、音は作り出すのではなく、受け取るものだという。「音の闇」の住人である作曲家に、あるとき天啓のごとく、「あるものの全体」がやってくる。それをかたちにするために作曲をするのだと言う。私が聴いた音は、その、「あるものの全体」そのものだったのだろうか。不思議な体験であった。(Tosca ブログへの投稿)

ジーによる農山村コミュニティの再建など、エコ・ソリューション(解決策)による文明の転換が必要だ。そのとき、農はその要の位置を占める」とまとめた。(天束愛子、「社会新報」二〇〇九年八月五日(第四五五号)に掲載)

●一〇月二四・二五日 第一四回セミナー

「生殖革命」と人間の未来

講師：江原由美子、中嶋公子、長沖暁子、青木やよひ
司会：石田久仁子

はじめに
青木やよひ

昨年から今年にかけて、「代理出産」を法律で認めるべきか否か、あるいは不妊治療の受精卵取り違い事件などによって、生殖医療をめぐる論議が高まり、国民的議論を重ねたうえで早急に法制化すべきだとの声があがっている。

この問題については、不妊の夫婦が生殖技術を使って子をもうけるのは、憲法第一三条に保障された「幸福追求の権利」であると主張と、生まれてくる子の将来に重大な個人的・社会的問題が生じるだけではなく、生殖という人間本来の営みに科学技術が介入することは、遺伝子操作などバイオテクノロジーによるクローン人間への道を開きかねない、これは同じ憲法第二三条で前提とされている「公共の福祉」を根底から揺るがすものである、という主張とが真っ向からぶつかり合い、決着するにいたっていない。

いま私たちは、これを人類史がかつて直面したことのない現状として認識するとともに、この問題のもつ文明的な意味を考えなくてはならない。

一〇月二四、二五日に標記セミナーが開かれた。私は今回初めて参加させていただいたいわばセミナー新入生だが、参加者は三十名ほどで、ウィラ・マーヤ・セミナー始まって以来の盛況だったそうである。

初日はセミナーの企画者、青木やよひさんのごあいさつで始まった。最初の報告者は首都大学東京の江原由美子さん。テーマは「フェミニズムと生殖革命」——その問題点と展望——で、女性の自己決定権と生殖技術の進展をめぐる全体的な見取り図が次のように提示された。

近代の出発点である「人権宣言」は、人（＝男）と市民（＝男市民）の権利宣言であり、自由権（人身の自由）はその基本にあった。しかし、「女性の権利」は初めから排除されていた。フェミニズムのたたかいは、「女性の権利」の獲得の歴史であった。女性参政権獲得後、「女性の権利」の課題として残ったものの一つに、女性にとって最も重大な性と生殖をめぐる権利、つまり女性の身体の自己決定権があった。

体外受精（＝胚移植技術）が出現するまでは、この女性の自己決定権と生殖技術の進歩の間に矛盾を見出すフェミニストは少数だった。生殖技術が国家によって利用されることを危惧していた女性たちである。しかし一九七八年の体外受精児誕生を境に、フェミニズムと新しい生殖技術との間には齟齬が生じ始める。不妊治療として開発されたはずの体外受精は、生殖機能の市場化、代理母や卵の提供といった女性の身体の道具化を促進させる一方で、成功率の低さゆえに、必ずしも不妊カップルへの救いとはならず、むしろ不妊に苦しむ多くの女性へのさらなるプレッシャーとなっているからである。さらに、生殖補助医療の進歩は生命操作や遺伝子操作を可能にし、その結果、優生思想の強化を危惧させるからである。それ以来、女性たちはこれまでの自己決定の主張を問い直し始めた、と江原さんは言う。

生殖を身体から引き離し外部化し、他者の身体の支配ですでに指摘されていたことが分かる。さらに、日本における運動として、クラインの「不妊」翻訳をきっかけにできた自助グループ・フィンレンジの会、さらに二〇〇五年にできた非配偶者間人工授精で生まれた人たちの自助グループ、DOGの取り組みが紹介された。

当時者の語りがこの二つのグループの活動の基本である。生殖は私的行為であると同時に、社会的規範や価値観にも規定された、社会が介入してくる行為でもある。だが不妊は個人の問題でしかないかのように、個人による解決が、自己決定が求められる。そもそもアプリオリに自己決定などは存在しない。これまでの女たちの自己決定の主張は、それができるように社会を変革するためのものでもあった。だからこそ、当時者が出会い語り合い個々の体験を整理し、当時者以外の人々と共有できる経験や知識にしていくことが不可欠で、そのための当時者へのサポートが必要である。それをもとに自然・家族・生殖・生命等に係る多様な価値観を創造することが重要で、そのことを通してしか科学の枠組みの転換、社会の変革はできないのではないか、と長沖さんは報告を締めくくった。

をもたらす「生殖革命」は、女性の自己決定権を困難にする。なぜなら、自己決定権は、他者の身体をコントロールしないようにするわれわれの義務としての「自己決定権の尊重」に基づくべきものだからだ。生殖技術の革新は女性に自由をもたらしたのか。私でもあり他者でもある胎児を自己決定に包摂できるのか。生殖の領域はすべて、自立した個々人を前提とするリベラリズムの虚構性をあぶり出す。近代の人権思想が生み出した自己決定権は、「生殖革命」に直面した女性の自己決定権の困難を通して再考され、他者の身体を支配するものとはならない。

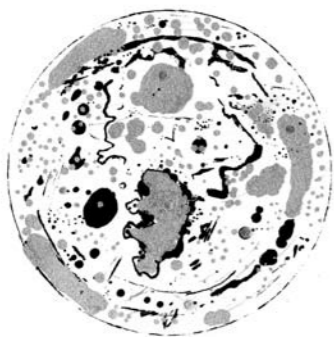
続いて日仏女性研究学会代表の中嶋公子さんが、江原さんの問題提起を引き継ぐかたちで「女性の身体の自己決定権とその困難——フランスを中心に」をテーマに報告した。その内容は、フランスや欧州の具体的事例、データを挙げながら、「身体の自己決定権＝自己の身体の処分権」を青木やよひさんが提唱する「生殖倫理」にどうつなげることができるのかという問いを軸に組み立てられたものだった。

人工妊娠中絶の権利の現状を例にとっても、女性の身体の自己決定権は、先進地域のように思われがちな欧州でも、実は、基本的権利として確立してはいない。一方では、生殖技術の進展によってもたらされた「産む自由」「産まない自由」の拡大は、いくつもの倫理上の重大な問題を引き起こし、この権利の確立をさらに困難な状況においている。

生殖倫理の視点からとくに注目すべきは、着床前診断、出生前診断による選択的中絶と代理懐胎の問題だ。前者は、自己決定権を通して、直接、優生思想に結びつく可能性をもつ。国家の優生学は個人の優生学を通して行われるようになったのだ。後者は、自己の身体の処分権を越えて、他者の身体の処分の領域（他者にとって——この場合、代理懐胎を引き受ける女性——、それが自らの

続いてセミナーに参加していた前述のDOGのメンバーの一人がグループの活動やAIDから生まれた子どもとしての経験を非常に整理されたかたちで語ってくれた。午後の自由討論でも、このグループのもう一人のメンバーが勇気ある発言してくれた。彼女たちの言葉が私たちの胸に重く響いた。これが長沖さんの言う経験の共有化だと思った。子どもに係る技術はけっして自己決定の枠には入らないことを私たちは実感できた。

三つの報告を受けて、最後に青木やよひさんが「私の問題提起——生命倫理から生殖倫理へ」と題する文明そのものを根源から問う問題提起を行なった。今日、生殖の人工操作が可能になった段階、とりわけ女性の卵子が体外に取り出され人工授精されるといふ段階から、生殖という生物的・社会的行為が人類史上初めての重大な転換の局面に到達したが、このクリティカルな転換が一般に認識されにくいのは「幸福追求の権利」のもとにどのような手段を使っても子を得るのは当然とする社会連念があるからだとし、それが「公共の福祉」の根底をゆるがしている。この状況を変えるためには従来の生命倫理の枠を大きく超える「生殖倫理」が必要であり、それに



身体の自己決定であるとする立場をとるフェミニストがいるとしても）に踏み込む、つまり他者の身体の支配だけでなく、生まれる子どもや代理母の家族までも巻き込み、母体の細分化や親子関係の複雑化をもたらすからである。さらに、代理懐胎は、同性親の問題をも提起する。

生殖技術に関する日仏の違いは、フランスの場合、生殖技術の拡大を前にして、国家倫理諮問委員会を設置し、国や市民のレベルで倫理的な視点からの議論があり、それが生殖関係の法律に活かされているのに対し、日本では倫理が不在のまま法がつくられていることにある。生殖は、産むという行為は女性の身体という場で展開する。生殖の倫理を考えると、女性がこの経験を自らの言葉で言語化していく必要がある。なぜなら、自己決定権を生み出した近代の人権思想は、男性の身体を普遍的なものとし、女性の身体の経験はそこから排除されているからである、と中嶋さんは強調した。

二日目は、まず慶応義塾大学の長沖暁子さんが「生殖技術とは何か——当時者の視点が与えるもの」と題して報告した。長沖さんの自己紹介にも「学生時代に出会った優性保護法と専攻した発生学が（生殖技術と女のからだへの自己決定権）というその後のテーマを決めた」とあったが、生物学者と運動家としての視点が交差するきわめて固有な立場からの報告だった。

一九五三年のDNA発見以来の生命工学の歩みの中に体外受精の技術を位置づけると、それが開く「地平」は生命全体に及ぶことが分かる。長沖さんは、だから倫理を問うのであれば、生殖に限らず生命全体の倫理への問いが必要だ、とまず主張した。続いて、女の身体を舞台にした自己決定権を狭めるものとしての生殖技術、その背景にある機会論的自然観や遺伝子還元主義や父権主義や優性思想を根源から問い直した一九八五年のフィンレンジ会議の決議文が紹介された。その後あきらかになっていく生殖技術の問題点のほぼすべてがこの決議文

よって人間とはなにか、生命とはなにか、大自然や宇宙と人間との関係はなにかを問いなおし、文明とその思考体系のあり方を変えなくてはならないと論じた。

さらに北沢方邦さんからは、私権、肥大化した欲望の正当化にもつながり得る「自己決定権」に代わる概念としての「個人の主権」が提案された。

昼食後の参加者全員による自由討論では、自己決定と「社会」「生殖技術と家父長制、生殖と「自然」、生殖倫理の観点からの生殖医療の実施のされ方や子ども「福祉」等の様々な問題について活発な意見交換が行なわれた。私自身も、大変刺激を受けた二日間だった。今回の議論がさらに深まるような新たな企画の実現を期待したい。

追記・この報告を書き終えた直後に、青木やよひさんの計報に接した。青木さんのご冥福を心からお祈りするとともに、セミナーを通して青木さんから私たちへ伝えられたことをしっかりと引き継いで行きたいと思う。

（石田久仁子、ブログでの報告文）

青木やよひ著作目録

著書

- 『愛の伝説 芸術家と女性たち』一九六八年 三一書房 (のち一九八九年廣済堂出版より新版)
- 『ホビの国―砂漠のインディアンを訪ねて』一九七五年 潮出版社 (のち一九九二年廣済堂文庫で新版)
- 『子供をゆめめるのは何か』一九八一年 第三文明社
- 『女性・その性の神話』一九八二年 オリジン出版センター
- 『性差の文化―比較の試み』一九八二年 金子書房
- 『フェミニズムとエコロジー』一九八六年 新評論
- 『シングル・カルチャー―ポスト家族のゆくえ』一九八七年 有斐閣
- 『女が自由を生きたとき―感性からのフェミニズム』一九八八年 オリジン出版センター
- 『シングル感覚―新しい女たちの選択』一九八九年 廣済堂出版
- 『遥かなる恋人に―ベイトーヴェン・愛の軌跡』一九九一年 筑摩書房 (のち『ベイトーヴェンの不滅の恋人』として一九九五年河出文庫で新版)
- 『ちよっと愛じゃない』一九九二年 小峰書店
- 『やさしい関係―共生感覚の時代』一九九二年 廣済堂出版
- 『ホビ、精霊たちの台地』一九九三年 P.H.P.研究所
- 『共生時代のフェミニズム』一九九四年 オリジン出版センター
- 『ボヘミア・ベイトーヴェン紀行』一九九五年 東京書籍
- 『ベイトーヴェン (不滅の恋人) の謎を解く』二〇〇一年 講談社現代新書
- 『ベイトーヴェン (不滅の恋人) の探究』二〇〇七年 平凡社ライブラリー (前著の最新資料による改訂版)
- 『カレレ・ベイトーヴェン』二〇〇四年 平凡社新書
- 『ベイトーヴェンの生涯』二〇〇九年 平凡社新書
- 『編著』
- 『片山敏彦著作集第九巻―自分に言う言葉』一九七二年 みすず書房
- 『誰のために子どもを産むか―性と生殖のフィロソフィー』一九七六年 風涛社 (のち一九八五年 オリジン出版センターより新版)
- 『戦争と女たち―女の論理からの反戦入門』一九八二年 オリジン出版センター
- 『フェミニズムの宇宙』一九八三年 新評論
- 『母性とは何か―新しい知と科学の地平から』一九八六年 金子書房
- 『図説ベイトーヴェン―愛と創造の生涯』一九九五年 河出書房新社
- 『歡喜! ベイトーヴェン 第九を愛しよう』二〇〇四年 小学館
- 共著
- 『女への賛歌』一九七三年 三省堂
- 『わたしの夫婦論』一九七五年 読売新聞社
- 『女性―その自立』一九七六年 第三文明社
- 『愛と激動―時代を生きた女たち』一九七六年 柘植書房
- 『戦後世界史の断面―上・下』一九七八年 朝日新聞社
- 『経済セックスとジェンダー』一九八三年 新評論
- 『看護への希い』一九八三年 日本看護出版会
- 『女の人権と性』一九八四年 径書房

訳書

- 『フェミニズムはどこへ行く―女性原理とエコロジー』一九八五年 ウィメンズブックストア松登堂
- 『昭和同時代を生きて―それぞれの戦後』一九八五年 有斐閣
- 『新国際秩序と平和』一九八六年 早稲田大学出版局
- 『女性と文明』一九八六年 春秋社
- 『私たちの明日をさぐる』一九八六年 婦人民生クラブ
- 『ジェンダー・文字・身体』一九八六年 新評論
- 『沈黙をやぶった女たち』一九八八年 ミネルヴァ書房
- 『家族心理学』第2巻 一九八八年 金子書房
- 『ライフサイクルと人間の意識』一九八八年 金子書房
- 『ア・プ・ナ・イ生殖革命』一九八九年 有斐閣
- 『時代を告げた女たち―20世紀フェミニズムへの道』一九九〇年 柘植書房
- 『私たちの視線―生きる場のフェミニズム』一九九〇年 社会評論社
- 『母性』を解説する。一九九一年 有斐閣選書
- 『私らしさで産む・産まない』一九九二年 農文協
- 『フェミニズム・コレクション』第11巻 一九九三年 勁草書房
- 『1968年の世界史』二〇〇九年 藤原書店
- 訳書
- エリノア・E・マッコビー『性差その起源と役割』(共訳) 一九七八年 家政教育出版社
- メイナード・ソロモン編『ベイトーヴェンの日記』(共訳) 二〇〇一年 岩波書店
- 自著のドイツ語訳
- Aoki Yayoi, Beethoven: Die Entschlüsselung des Ratsel um die "Unsterbliche Geliebte". 2008, Inditium, München. (平凡社ライブラリー『ベイトーヴェン (不滅の恋人) の探究』にもとづくが、さらに新しい資料による独自の改訂版で、平凡社版にはない詳細な注と文献表を付しており、この問題に対する決定版である)

事務局より

「知と文明のフォーラム」代表の名前から、「青木やよひ」の五文字を外すことになりました。不屈の精神の塊といえる故人であっただけに、現代社会の厳しい状況下での喪失感は大きく、深いものです。けれども、そこで呆然と立ちつくしては、故人の遺志を裏切ることになりかねません。

「いつの時代の人々も、自分の時代ほど辛く厳しいものはない、と思っていたのだから、めげては駄目」と諭すのが口癖だった故人です。フォーラムの力強い継続をなによりも願っていたはず。みなさまのご協力をえて、さらなる一歩を印したいところです。

当フォーラムではブログを開設しています。「北沢方邦の伊豆高原日記」、「楽しい映画と美しいオペラ」、「おいしい本が読みたい」のほか、フォーラム関連の文化活動の案内、報告を順次掲載していますので、どうぞご利用ください。
http://blog.goo.ne.jp/maya18_2006/

ヴィラ・マヤヤ便り No.3
 発行日 2010年6月13日
 発行所 知と文明のフォーラム
 〒413-0232
 伊東市八幡野伊豆高原 14-6
 代表 北沢方邦
 編集部
 TEL 042-488-3048
 FAX 042-441-4565

今後の活動予定

- 六月一三日 第一五回セミナー
 青木やよひ追悼レクチャー・コンサート
 『ベイトーヴェンの生涯』を聴く―『悲愴』から『デアベリ変奏曲』へ
 鼎談・北沢方邦、西村 朗、高橋アキ
 演奏・高橋アキ
 会場・津田ホール
- 九月一、二日 第一六回セミナー
 日本の安全保障と今後の世界 (予定)
 講師・坂本義和
 会場・伊豆高原ヴィラ・マヤヤ
- 一〇月三〇日 第一七回セミナー
 シンポジウム (『生殖革命』と人間の未来②)
 パネリスト・江原由美子、長沖暁子、中嶋公子 (予定)
 司会・石田久仁子 (予定)
 会場・日本女子大学